

# 伝えたい

## 戦後80年 過去から未来

伝えたい記憶と言葉

### 高林千幸さん 74

岡谷市堀ノ内

幼い頃から私の家には、赤十字のついた病院船の写真が飾られていた。何故この写真が？と、いつも疑問に思っていた。そこには、赤十字をつけた病院船「氷川丸」の写真とともに、水兵帽の「大日本帝国海軍」の帯と徽章、看護兵の合格証、履歴表などがあり、昭和16年1月横須賀海兵団入団の若い水兵の写真も飾られていた。

その写真の主こそ、大正9年10月17日生まれの20歳の父であっ



高林千幸さん

## 親父が残した言葉

た。父は太平洋戦争中、海軍の病院船として使われていたこの氷川丸に衛生兵として乗船していた。50年前だろうか、家族で横浜を訪れたことがあった。横濱が病室、これは船長室・・・



病院船「氷川丸」と父高林源治の水兵姿、その水兵帽の「大日本帝国海軍」の帯、徽章、看護兵の合格証、履歴表を一体化した額を家の上座に掲げている

どと、青春時代を過ごした鮮烈な思い出を語ってくれた。氷川丸はそもそも大型客船で生系も運び、船内には「シルクルーム」があった。太平洋戦争中は、海軍が負傷兵の救助に当たる特殊病院船として使用した。塗装を白に変え、船体に赤十字をつけた氷川丸は、トラック島、ラバウルなどの南方戦線から三万人あまりの負傷兵を輸送する船に変容した。氷川丸は三回の触雷に遭いながらも、大型客船としては唯一沈没を免れた船であった。

父は、折に触れ当時の話をよくしてくれた。「病院船に運ばれてくる負傷兵の手足はちぎれ、目は飛び出し、内臓は裂け、それこそ毎日が地獄絵図だった。息のある負傷兵は病院で手当てをするために横浜港へ運び、亡

くなった方は、皆で泣く泣くゴザにくるんで水葬にした」「一つの貴重な命が、こんなにも無残に散ってよいものか」と語っていた。そして「何があっても戦争はダメだ。戦争は悲惨だ。絶対にしてはいけない」が常言であった。戦火を浴び、まさに死ぬ目を何度も経験し死線を越えてきた人間の話は、幾千の言葉よりも重い。

悲惨な戦争を経験した父は、青春時代の僕も悲しい思い出を残し、11年前、93歳で突然旅立った。

先般、私は鹿児島県南九州市の知覧特攻平和会館と広島平和記念資料館を訪れた。父の「絶対に戦争をしてはならない」の言葉を涙とともに噛みしめた。

※原文を尊重して掲載しました。